

小学校体育授業におけるサッカーを素材とした授業プログラムの開発

—小学校 4 学年を対象とした縦断的検証—

菅原彰人(岩手大学)

1. 目的

本研究では、JFA の提案する「サッカー指導の教科書」に記載されている小学校 4 年生を対象としたゲーム領域およびミニサッカー単元（計 7 時間）を実践する。4 年生で身に付けさせたいテーマ（シュートをしよう）の技能が向上するか検証するとともに、過去 3 年間の学習での積み上げがその後のサッカーの学習にどのように活かされているのか縦断的な学びの関連性を探求することを目的とした。

2. 方法

- 1) 対象：小学 4 年生(32 名) 7 回授業
- 2) 時期：平成 29 年 10 月 12 日～11 月 9 日
- 3) ゲーム分析・スキルテスト・活動量測定

授業をビデオカメラで録画し、3 対 3+GK ゲーム 1 試合におけるシュートの前にゴールの位置を確認している回数(①)、シュートしやすい位置にコントロールしている回数(②)、シュート後のフォロースルーの回数(③)に注目して分析。シュート決定率の分析。授業前後のシュートスキルテスト比較。ベルトポーチを利用した活動量測定。

3. 結果と考察

ゲーム分析により①～③各項目の出現回数やシュート決定率の増加がみられ、授業における活動の成果が認められた。授業回数が進むにつれて、ゴールを強く意識するようになり、よりゴールを目指して動きながらボールを受け、シュートする傾向が増加したことが要因と考えられる。(表 1)

表 1 シュート時キーファクター出現回数の変化

キーファクター	1 校時目	4 校時目	7 校時目
①ゴール確認	3	8	9
②Ball 置き所	6	7	9
③キック方法	5	6	10

低学年ではたくさんボールに触ろうといった基礎的な技能を養うための授業構成、中学年ではパ

スやシュートといった基礎的な技能に加え、仲間と声を掛け合うことや連携する活動がある。基礎技術が向上し、子どもたちは互いにコミュニケーションを取り合うことで、各学年での学習の積み上げによってより組織的なゲームができていた。約半数の児童にスキルテストの向上がみられた。

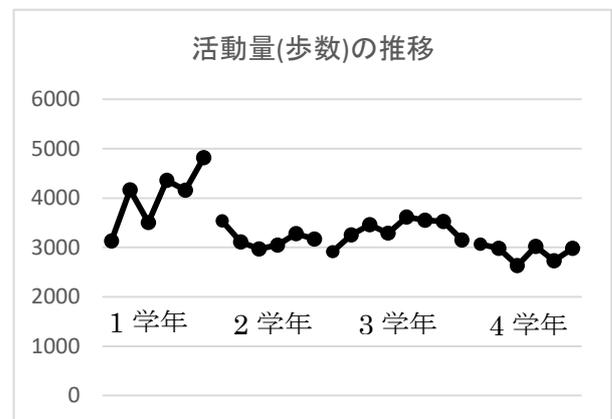


図 1 各学年における授業中の活動量の推移

授業中の活動量については平均 3000 歩を超えており、各学年の活動内容において十分な運動量が確保される可能性が認められた。(図 1)

4. 結論

毎時間のゲーム分析を通して、4 学年で習得させたいシュート技能の向上がみられた。また各学年と同様に十分な活動量が確保されていた。ゲームでの様々な場面を通して 1 年次のキック、2 年次のドリブル、3 年次のパスの学習が生かされているプレーがみられた。これらのことから JFA の提案する 1・2・3・4 学年での指導案を各学年で縦断的に実践し 4 年次の試合を分析した結果、試合におけるシュートの技能と体力向上に有効な授業プログラムであることが推察された。

<参考文献>

- 1) 公益財団法人日本サッカー協会著(2014)サッカー指導の教科書、東洋館出版社